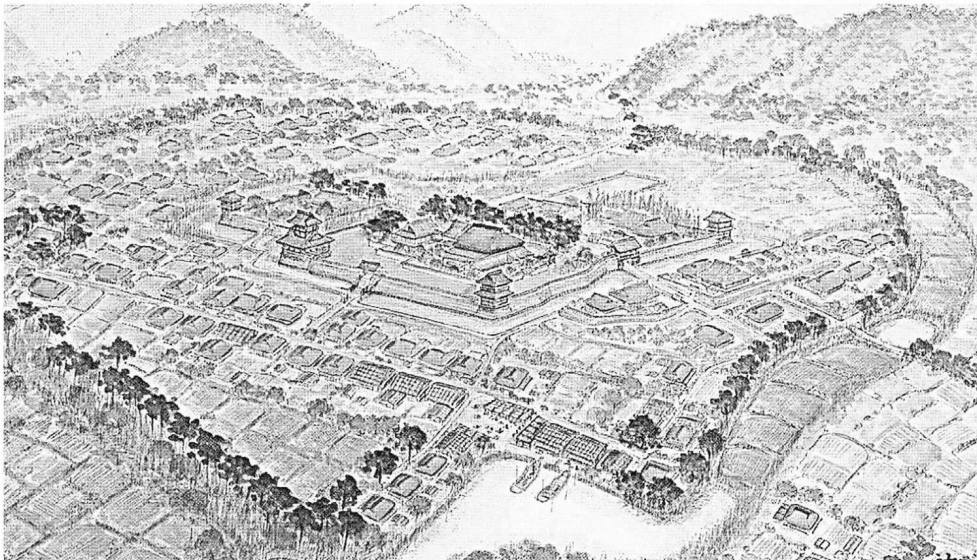


- ④東の攻め口の丹羽長秀、若狭衆は、城楼（せいろ）を二つ組み上げ、大鉄炮を打ち込み、南東の攻め口の滝川一益は城楼から大鉄炮で塀や矢蔵を打ち壊し、矢蔵に火を放ち焼き落とした。この他、諸方面でも、それぞれ城楼・築山を築き、日夜攻めた。城方が和睦をしようとしても、信長は検使（万見仙千代ら）まで出し厳命しており、許さなかった。
- ⑤7月15日夜、滝川一益、丹羽長秀が東の丸に突入し、16日には中の丸へ攻め込んで、神吉民部少輔を討ち取り、天主に火を懸けた。両軍が入り乱れ激しく戦う間に、天主は焼け落ち、城兵の過半数が焼死した。」

これらの記述から、城に「天主（てんしゅ）」らしき建物があつたことや織田の大軍の激しい城攻めに対し播磨武士たちが約20日間も粘り強く戦つたことがうかがえます。



神吉城復原図 城郭研究家 木内内則氏制作

(きうちただのり)

一方、「別所長治記」や「播州神吉合戦記」には、城から打つて出た神吉民部少輔の活躍や梶原冬庵（道菴）奮

戦のようすが記されており、三木市法界寺所蔵の「三木合戦図会」にも橋げたを渡つて敵兵の首を取る冬庵の勇姿が描かれています（前掲図）。

また、神吉頼定の叔父神吉藤太夫について、「別所長治記」は裏切つて頼定を討ち信忠に首を奉（たてまつ）ると記し、「信長公記」は降参し志方城へ退去していったとしています。

このほか、「神吉系譜」（「印南郡誌」）に、頼定の奥方は黒田官兵衛の娘で、落城時に長刀を以て切抜け魚橋に落延びたとありますが、黒田家の記録には見えず、確かなことは分かりません。

神吉城跡には、江戸時代初期に常楽寺が建てられました。「播磨鑑（はりまかがみ）」には「【神吉城】東西五十七間南北四十三間…古城ハ常楽寺ノ境内二成二ノ丸ハ田地ト成」と記されており、常楽寺の境内地が中の丸（約104m×約78m）であつたようです。

現在、城の遺構は殆ど残っていませんが、常楽寺周辺の地形、境内北東部に見られる土塁らしき築山や土盛、町内近隣に残る

「御幸通」「馬場所」「於長垣内」「牛立」「六万」「六本松」などの字名に、往時を偲ぶことができます。また、境内北西部の墓地に

は、城主神吉頼定の墓石がひっそりと立ち、435年前の激しい戦いと強者（つわもの）たちの夢を今に伝えています。

【発行元：神吉町内会／文責：久保一人】